

【紹介】

Michelle Allen-Emerson (ed.), *Sanitary Reform
in Victorian Britain*, pt1, 3vols, 2012;
pt2 3vols, 2013, Pickering & Chatto.

紹

介

澤 田 庸 三

1. はじめに
2. 第1巻から第6巻について
3. 第1巻「医療と衛生科学」
4. 第2巻「地方における衛生改革」
5. 第3巻「衛生工学」
6. 第4巻「衛生改革と都市改善」
7. 第5巻「衛生改革, 階級, ビクトリア時代の都市」
8. 第6巻「世紀末の評価と新たな方向」
9. おわりに

1. は じ め に

Sanitary Reform in Victorian Britain に、評者は、あたかも定訳のごとく「ビクトリア時代の衛生改革」という訳をあてた。つまり、Reform を単に「改善」ではなく、社会的、経済的、政治的制度、更に諸組織、諸政策を部分的に「改善」するという意味で、全面変革を意味する「革命」と対峙する用語である「改革」を用い、既存体制の枠内で改善、改良を継続する、あるいは補強・再編により動揺・崩壊を防ぐという意味をあてたことになるということである。管見によれば、一般的な辞書では Sanitary Reform という用例が列挙されず、自然科学系の英和大辞典でも、Sanitary Reform は、列挙されるが、訳としては「衛生改善」である。本史料集は、Sanitary Reform が私的、公的「改善」を区別せねばならないことをはじめ、年代順に、史料を配列しつつも、異なっ

た「テーマ」を設定し、それらを対比、交差させることで、新たな接点を、また時系列を跨ぐ、別の「テーマ」ないし「観点」を示唆するなどの特質を有するとともに、本史料集の検討によって、読者は、さらに多くの示唆を見出す契機を与えられる。

本史料集の監修者は、序文で、「衛生改革」のもつ広領域性を説明するのであるが、要約すると、以下のようである。

——1848年に都市衛生協会 (The Health of Towns Association) の声明は、「我々の協会の対象は、我々の指定によって、都市の健康に限定されているようであるが、我々は、次のことを確信する。すなわち、その帰着するところは、人の家族全員の身体的、道徳的、宗教的改善にも及ぶもの⁽¹⁾」であり、環境の改善が、身体的、道徳的、宗教的な健康と密接に関連すると。

「衛生改善」は、確かに、幾多の文明や時代においても語られ、しかも改善されるべき「都市の健康ないし不健康」は、個人的、社会的、まさにあらゆる「病」の印としての「不潔」という概念で語られきた。しかし、都市化と産業化されたビクトリア時代前半のイギリス、特にロンドンなどの都市部においては、その「不潔」は、新たな意味を含むことになる。「不潔」は、都市が造り出した、貧困や過密状態から売春や酩酊まで、産業廃棄物で黒くなった河川から排泄物で汚れた街路や裏通りまで、ほばいかなるものをも意味することとなり、「衛生改革は、不潔を根絶し、変化させること、科学、医療、エンジニアリング、建築、教育、警察と法律によって、健康の助けになる状況を促進することと関連づけられた⁽³⁾」——。

本稿は、このような広範な領域の「衛生改革」に関わる歴史的史料（新聞記事・雑誌論文・小説・調査報告書など）を6冊（第1巻から第6巻まで、約2500頁）にまとめた *Sanitary Reform in Victorian Britain* について、各巻にどのような史料が含まれているかを中心に紹介しつつ、本史料集の包摂する種々の示唆にも接近したい。

2. 第1巻から第6巻について

さて、*Sanitary Reform in Victorian Britain* の第1～3巻は、PART I として、2012年に、第4～6巻は、PART II として、2013年に刊行された。各巻には、
292(924) 法と政治 65巻3号 (2014年11月)

以下のような表題が付されている。

Michelle Allen-Emerson (ed.), *Sanitary Reform in Victorian Britain*, pt1, 3vols, 2012; pt2 3vols, 2013, Pickering & Chatto.

紹

Part I

Volume 1

Tina Young Choi (ed.), *Medicine and Sanitary Science*, (general editor Michelle Allen-Emerson, *Sanitary Reform in Victorian Britain*, pt. 1, v. 1), xxxiv+320pp, Pickering & Chatto, 2012.

介

Volume 2

Christopher S. Hamlin (ed.), *Sanitary Reform in the Provinces*, (general editor Michelle Allen-Emerson, *Sanitary Reform in Victorian Britain*, pt. 1, v. 2), xiii+486pp, Pickering & Chatto, 2012.

Volume 3

Michelle Allen-Emerson (ed.), *Sanitary engineering*, (general editor Michelle Allen-Emerson, *Sanitary Reform in Victorian Britain*, pt. 1, v. 3), xxi+380pp, Pickering & Chatto, 2012

Part II

Volume 4

Michelle Allen-Emerson (ed.), *Sanitary Reform and Urban Improvement*, (general editor Michelle Allen-Emerson, *Sanitary Reform in Victorian Britain*, pt. 2, v. 4), xxiii+396pp, Pickering & Chatto, 2013.

Volume 5

Tom Crook (ed.), *Sanitary reform, class and the Victorian city*, (general editor Michelle Allen-Emerson, *Sanitary Reform in Victorian Britain*, pt. 2, v. 5), xxxii+299pp, Pickering & Chatto, 2013.

volume 6

Barbara Leckie(ed.), *End of Century Assessments and New Directions*, (general editor Michelle Allen-Emerson, *Sanitary Reform in Victorian Britain*, pt. 2, v. 6), xxxiii+472pp, Pickering & Chatto, 2013.

各巻には、編者による序文（第1巻のみ、全巻の監修者と第1巻の編者の序文）があり、そこで、それぞれの編集意図や当該巻に含まれている史料の概要を説明している。第1巻にある全巻に関する序文で、監修者は、衛生改革とは、「不潔」を根絶させること、科学、医療、工学技術、建築、教育、警察、そして法律によって健康に資する状況を増進することであると幅広い観点に注目し、多少複雑で明確さを欠くことになっても、衛生改革に関連する人物、計画、事件を常を選んで包括的に調べることが肝要であると考えたと述べている。各巻は、下記のように、医療、技術、建築といった領域と衛生領域との「交差するところ」に焦点をあてつつも、医療・技術などそれぞれ異なった領域として注目すべき「表題」の下に編集されているということである。⁽⁴⁾

そして、各巻は、第1巻に、「医療と衛生科学」、第2巻に、「地方における衛生改革」、第3巻に、「衛生工学」、第4巻に、「衛生改革と都市改善」、第5巻に、「衛生改革、階級、ビクトリア時代の都市」、第6巻に、「世紀末の評価と新たな方向」と各々表題が付され、これらの「表題」のもとに収集・分類された各巻は、さらにテーマごとに、分類され、そして再度、史料は、編者の解題（脚注を付した）とともに細分類され、収められている。例えば、「医療と衛生科学」と題する第1巻は、「疾病と衛生上の原因」、「公衆衛生の出現（創発）」、「衛生改革と統治の拡大」の三つのテーマに分割され、テーマの「疾病と衛生上の原因」は、さらに「病気の原因に関する19世紀前半の議論」などに分割され、その題のもとに選択された諸史料とそれらの解題が収められているという次第である。

3. 第1巻「医療と衛生科学」

さて、第1巻では、「医療と衛生科学」を表題とし、医療と衛生の絡み合った歴史に注目し、医師が衛生状況と疾病との関連性にどのように取り組んだのか、さらに医療と衛生科学が植民地への統治拡大をいかに補強したかに関する
294(926) 法と政治 65巻3号 (2014年11月)

文書を扱うとして、Ⅰの「疾病と衛生上の原因」、Ⅱの「公衆衛生の出現（創発）」、さらにⅢの「衛生改革と統治の拡大」という三つのテーマのもとに、史料が、分類・収集されている。つまり、ここでは、ディケンズの小説で粗野な外科医として戯画化されたり、下僕に素気なくあしらわれたりした医師が衛生改革を通じて、科学理論、統計、職業的合法性で武装しつつ、専門家へと転身していくプロセスが描かれるのであるが、専門的發展の「物語」も衛生改革の緊急性により、政治的、経済的、個人的状況が複雑に絡まった緊張感ある移行を示している。⁽⁵⁾

Ⅰの「疾病と衛生上の原因」は、以下六つの史料をあげているが、次の三史料は、天然痘やコレラに関する疾病原因論及び環境要素論に関する、衛生改革運動に先駆ける、19世紀前半の議論である。

『流行性・伝染性疾病に関する調査結果』（1817年）、
『イギリスの検疫法とヨーロッパ大陸諸国、とりわけスペイン人の、いわゆる衛生法に関する所見』（1823年）、
『伝染の対象に関する見解の進展概観と検疫に関する諸所見』（1825年）、

次の史料は、1884年のコッホによるコレラ菌発見に先立つ顕微鏡による初期的研究の事例である。

『コレラによる腸の排出物に見られる微細な物体の特質と移入に関する報告書』（外部因子が身体内部に影響を及ぼすと主張する）（1849年）、

以下の二つの史料は、⁽⁶⁾瘴気理論から細菌理論への移行期における衛生医学が遭遇した理論的、専門的、政治的混乱を示すものとして、興味深い。

『1854年8月のウエストミンスターセント・ジェームズ教区でのコレラの発生に関する報告書』（19世紀半ばの瘴気理論（ミアズマ理論）の再評価に関している）（1855年）、

『ロンドン・シティの連合ガーディアンと、⁽⁷⁾枢密院の命令により任命されたコレラの原因と予防に関する特別委員会とに提出された報告書』（1866年）⁽⁸⁾

前者は、コレラの拡散が汚染された給水に因るものとの推論、すなわち19世

紀の疫学における画期的仕事なしたジョン・スノーの推論を調査する委員会報告書である。両報告ともに、ミアズマ理論すなわち瘴気理論を放棄しておらず、後者の報告書でも、自律的に疾病を引き起こす病原として確定した用語を用いず、微生物 (germ)、毒 (poison)、カビ (fungus)、微塵 (atom) といった用語が相互交換して、使用されている⁽⁹⁾。

Ⅱの「公衆衛生の出現 (創発)」では、医療は、個々の患者を対象に理論や治療を開発してきたのであるが、19世紀の迅速な都市化は、伝染病をより脅威あるものとし、多くの人口を対象とした治療に関する新たな戦略として、公衆衛生が要請されることとなった⁽¹⁰⁾。

『英国における1832年のコレラの再来』(1832年)

この史料は、1832年のコレラに関する16頁の手書きの統計分析書で、地域における死亡率などコレラの衝撃を数字で伝える史料である。

『衛生改革に関する協会メンバーと公衆に対する委員会報告書』(ロンドン衛生協会による)⁽¹¹⁾ (1847年)。

この史料には、ロンドン市長のような旧いより伝統的な権威に入れ替わって、政治、医師、地域の指導者が専門的見解や首都のより包括的ヴィジョンを権威とする経緯、そして、1846年にロンドンに設立された協会の名簿や協会の設立目的などと、ロンドン在住の3000人の聖職者、医師、事務弁護士、測量士、建築家、技師、教区会の役人への51の質問とその回答の要約が含まれている。この史料からは、「包括的」(comprehensive) という用語が示唆するように、公衆衛生の中央集権的傾向など都市の展開が作り出した新たな社会的、政治的諸関係が読み取れる⁽¹²⁾。

以下の史料は、数字や表などの統計が、改革者と報告書の読者との間での「合意」を引き出し、地域の多様性より一般的疫学的結論を導き出す働きをもったことを示している⁽¹³⁾。

『1848-9年のロンドンの衛生状況に関する報告書』(ジョン・サイモンによる)⁽¹⁴⁾

(1849年),

『タウントン教区連合の作業所でのコレラ発生とガーディアンへの対応に関する報告書』(サザーランド博士による)(1849年),

なかでも, 大ロンドンの公衆衛生に関するものとして,

『中央衛生局 聖ジルおよび聖ジョージ・ブルームズベリー連合教区の伝染病発生地区の衛生状況に関する報告書』(1852年),

『1848~49年のイングランドにおけるコレラの死亡数に関する報告書』(ウィリアム・ファーによる)⁽¹⁵⁾(1852年)

『公衆衛生について』(バーミンガムのクイーンズ・カレッジの医学開講の式辞)(1855年), が収められている。

Ⅲの「衛生改革と統治の拡大」では, 英国の植民地へ衛生医療の拡大を示す史料が収められている。英国による軍事的, 行政的統制の強化とインドでの衛生医学の展開が一致するとの指摘や英国と同様, 瘴気理論への固執, かかる理論に対応した換気と密集への注目, 更にこれらの施策の実施と権限がもたらす問題の提示は, 興味深い⁽¹⁶⁾。

『インドのベンガル及び北西部地域の公衆衛生, 気候, 衛生状況, そして流行病に関する論説』(1848年),

『熱帯地方の健康, インドのヨーロッパ人に応用された衛生学術』(1862年),

『1860年代のボンベイの衛生状況について, ボンベイ軍の全衛生状況に関する報告書』(1864年)

『ボンベイ政府の衛生委員会の年次報告書』(1865年),

『陸軍の指揮官, 医務将校, その他の将校への指導書』(1866年) が含まれている。

4. 第2巻「地方における衛生改革」

第2巻は, 「地方における衛生改革」と題し, イングランド, アイルランド, スコットランドの都市やタウンにおける衛生改革に関連した史料が収集され, 衛生問題に対して各地域の反応が一律ではなく, 多様な反応が見られるとしている。この2巻の編者は, 19世紀の衛生改革に関する所収史料の特質を⁽¹⁷⁾(1)

衛生改革は、画一的、説明責任的行政が展開した主要な分野である。(2) 1830年代後半に始まる諸々の衛生改革が、エドウィン・チャドウィックによって導かれる。(3) ロンドンは、衛生改革の必要性および改革の実績のいずれにおいても主要な場所である。(4) 公衆衛生に付属する清潔の文化は、中産階級の基礎であり、その構成員たる条件を提示すると、理解する。特に(4)は、従来から指摘されてきた(1)～(3)と違って、文化史という最近の研究動向を反映している、と指摘されている。

以下の3史料(V2-PP. 1～27.)は、チャドウィック以前の時代における地域の衛生状況と公衆衛生運動に関する18世紀及び19世紀前半の事例である。ここでは、Public Nuisance(不法行為・不法妨害)の概念とそれに関する論争、そして伝染性の熱病に対する地域の反応、さらに地域共同体は、いわゆる公衆衛生運動以前から衛生問題に関心を持っていたことが示されている。

『街路を汚染する肉屋の不法行為』(1754年)⁽¹⁸⁾,

『ミドルセックス・カウンティ内の荘園裁判所の1682年から昨今までの裁判要録』(1789年),⁽¹⁹⁾

『キングストン・アボン・ハルの伝染性熱病に関する報告書抜粋と貧困層の状況改善及び快適さ促進協会の報告書』(1805年),

以下の史料(V2-pp. 29-119.)は、公衆衛生問題がイングランド、スコットランド、アイルランド、それぞれの地域により、都市の基盤の問題、階級関係、宗教的な帰属意識、地方政府(地方行政)、法律と行政制度につき、相異すること示している。

『ダブリンの下層階層の疾病の原因とその特質に関する医療報告書』(1822年),

『1830年夏のグラスゴーの貧困層に蔓延した疾病報告書』(1830年),

『汚染河川騒ぎ! エディンバラ近郊の農業灌漑の特質と歴史を説明する声明』⁽²⁰⁾
(1840年),

『アイルランドにおける飢饉と熱病・その原因と影響に関するパンフレット』
(1846年),

『スコットランドに公衆衛生法を制定するに当たっての第一次及び第二次委員
298(930) 法と政治 65巻3号 (2014年11月)

会報告書』(1848-9 年),

『ダービーの衛生状況に関する報告書』(1842年),

以下の史料 (V2-PP. 121-178.) は, エドウィン・チャドウィックの衛生調査のために情報源となった1839~40年に委嘱された調査報告である。

『トルロ (Truro)⁽²¹⁾ の衛生状況に関する報告書』(1842年),

『トラネント (Tranent)⁽²²⁾ の衛生状況と経済に関する報告』(1842年),

以下の史料 (V2-pp. 179-210.) は, 1848年の公衆衛生法下で実施された地域担当の監察官による調査報告書で, それらは, 衛生問題が, 普遍的とはいえるが, 地域により歴史, 関係する人物が監察官の業務遂行に関連することを示すものといわれている。⁽²³⁾

『マーサー (Merthyr)⁽²⁴⁾ の社会状況に関する報告書』(1853年),

『デヴォン・カウンティのブリクサム (Brixham) の衛生施設と住民の衛生状況に関する事前調査報告書』(中央衛生委員会に提出) (1854年),⁽²⁵⁾

以下の史料 (V2-pp. 211-284.) は, 衛生改革や国家による特定の衛生施策に対する反対状況を扱っている。地方当局の無関心, 無能を示すものや地方における権力の喪失, 名声に対する侮辱への懸念からの反対が示されている。厳格ではなく柔軟な対応, 中央統制反対, 廃棄物の国家基準への反対が論じられた。

『1848年の公衆衛生法案に関して都市衛生協会が実施した主要都市へのアンケート (都市法人からの反対を含む) 調査の報告書』(1848年),

『ケンブリッジ・カウンティのエリーに関する事前調査報告書』(1850年),

『1855年の公衆衛生法案と汚物除去法案に関する反中央集権連合 (Anti-Centralization Union)』の小冊子 (1855年),

『地方自治庁長官への汚染者の書簡』(1875年),⁽²⁶⁾

以下の史料 (V2-PP. 285-429.) は, 監察官は, 衛生改革業務に携わるにつれ, 次第に専門的見解や権威を獲得することになり, 専門的見解が影響力を持つにつれ, 素人との間に専門的見解を巡りギャップ (浄化法を学ぶことの焦燥感の

惹起など) 発生を明らかにしている。⁽²⁷⁾

『リヴァプール・バラーの衛生委員会への所属技術者の衛生施設の現状報告書』
(1848年),

『イングランドの数都市の下水工事にに関する報告書』(1869年)

『ヨーク・カウンティのバンスリー・バラー・カウンスル任命の下水敷設地域
視察委員報告書』(1874年),

『地方での下水利用農法に関する下院議員への書簡』(1876年),

『地方における家庭下水の処理・河川汚染予防・地方当局の不適切な対応に関
する文書』(1878年),

以下の史料(V2-PP. 431-70)は、衛生問題が広域化することを示し、広域
における衛生問題の解決が、民主主義よりもテクノクラシーの優位をもたらした
⁽²⁸⁾
たのである。

『ビーコンズフィールド伯総理への書簡にある信じられない話』(1879年),

『クライド川の浄化と改善に関する文書』(1891年),

『マーザー・イーウェル合同衛生委員会(Mersey and Irwell Joint Board)の事
前調査報告書』(1892年),

5. 第3巻「衛生工学」

第3巻は、産業都市を衛生的なユートピアとするような、「川の水を家庭内
の蛇口や水洗トイレに流入し、すべての集積された廃棄物を下水道に排出し、
更に農業地区に運んでいく」循環式の給排水システムの展望やイデオロギーで
はなく、「衛生工学」を表題とし、土木技師や測量士の知識が必要とされる衛
生改革の実践、すなわち、衛生技術と関連したサービスに焦点を合わせてい
⁽³⁰⁾
る。

第3巻のテーマIの「タウンの下水道」のもとに、土地の排水のために用い
られた下水道が汚物を除去するために「公衆衛生問題に下水道技術を適用する」
という利用方法の変更を示す史料や下水道システムの実施が川の汚染を惹起し
たことを示す史料を収集している。

以下の史料は、前者の下水道の利用法の移行を示しているのだが、汚水だめを廃し、下水道を廃棄物のパイプとすることで川の汚染が進むことになる。⁽³¹⁾

『コレラと下水道ないし排水施設との関連及び首都の健康と改善』に関するパンフレット（1832年）、

『ウェストミンスター及び一部ミドルセックス・カウンティの排水裁判所の中央救貧法委員会報告書への上奏文』（1842年）、

『首都下水委員会の1848年2月から1856年3月までの報告書及び文書』、

『同委員会の測量に関する記録』（1848年3月）、

『同委員会の汚水溜清掃に関する規制』（1848年8月）、

『同委員会の排水施設に関する事前調査報告書』（1849年7月）、

『足下の障害』（1852年）、

次の三つの文書は、土木技術上の複雑さや過大な経費により、汚水だめの閉鎖と下水道への転換が進まなかった地域での推進派と反対派の対抗などを示している。⁽³²⁾

『オックスフォード大学とオックスフォード市の衛生調査』（1851年）、

『ウィンチェスター下水調査員会報告書』（1866年）、

『我が下水溝（川）』（1866年）、

『主幹下水に必置すべきとすべきでないことに関する報告書』（J. W. バザルゲッテ⁽³³⁾）（1871年）

ロンドンの雨水及び汚水は、引き潮にはテムズ川に注ぎ込まれるが、上げ潮時には下水道に逆流する。これを防止するため、テムズの北部用と南部用にそれぞれ川に沿って遮断下水道を建設し、テムズ下流迄、汚水を運ぶというのがバザルゲッテの計画であつた。⁽³⁴⁾確かに、この主幹下水は、1871年12月に完成したとはいえ、すでに公式の開通式が6年前に済まされ、彼の計画案も、1856年に提出され、建設施工の法律が1858年に成立していること考慮に入れると、この文書の表題や年代は、この計画に関わる政治的意味合いを示すものといえる。⁽³⁵⁾

Ⅱの「上水道」のテーマのもとに、18世紀では水が健康の促進に関連すると

考えられていたのが、やがて、快適さから医学的、道徳的意味合いを含みつつ、不潔な水と疾病との関連性、莫大な量の水道の使用は、下水道・道路清掃から家事・入浴まで種々の衛生目的に必要とされていくシフトに注目する史料が収集されている。

次の文書は、都市では、下水道より上水道（給水）の方が基盤的事柄であったことを示している。

『首都の上水道』（1840年）、

次の冊子は、1849年における公衆衛生に関する思考を規定していたのはコレラであり、伝染病こそ衛生改革の要請、とりわけ首都における上水道改善の要請を促進したことを示している。

『首都一番の水道会社、民間の話題に関する見解』（1849年）

次のグラスゴーの水道とマンチェスターの水道に関する文書（V3-P. 209-60.）⁽³⁶⁾は、グラスゴーでは1847年に、マンチェスターでは1855年とともに市営水道化が進み、都市当局は、都市化・工業化された生活を支えるために、自然の恩恵にあずかりつつ、トンネルと上水道による大規模配水工事に投資したことを示している。

『敬意ある忠告』（1853年）、

「グラスゴー・カトリン湖水道計画」『グラスゴー・ヘラルド紙』（1854年）、

『マンチェスター都市法人のサミアー水道計画』（1878年）、

『ロンドンの水道』⁽³⁷⁾（1878年）

この冊子（V3-pp. 263～81.）は、水道会社と首都の給水を首都土木局が統制する計画（二つの法案の上程によって）への批判であり、市営化したグラスゴーとマンチェスターとは異なる状況を示唆している。

Ⅲのテーマ「成果、代替施設、実験」では、水圧利用の下水道システムは、大規模な廃棄物処理能力という便宜性を有するが同時に河川の汚染という問題

点、つまり、近代的な衛生基盤の創設における限界・反対に焦点を合わせた史料を収集している。

紹

以下の文書（V3-pp. 283～328.）は、汚水のリサイクル方法を主唱するが、水流ないし水圧を利用した下水道との関連性については、それぞれ異なる主張を示している。

介

『汚染されていない川』⁽³⁸⁾（1858年）、

『下水道改革』（1860年）、

『残滓処理、下水システムの処理比較』（1868年）、

以下の文書（V3-pp. 353～62.）では、下水処理に関する首都土木局の試みは、19世紀末における英国や北アメリカの都市地域がとっていた方向性を示している。

『公衆衛生および地方自治（地方政府）と近代工学の関係』（1876年）、

『下水処理に関する文書』⁽³⁹⁾（1879年）、

『沈殿及び脱臭による下水処理に関する報告書抜粋』（首都土木局⁽⁴⁰⁾）（1886年）がある。

6. 第4巻「衛生改革と都市改善」

第4巻は、「衛生改革と都市改良」を表題に衛生改革の施策が身体的・道徳的「健康」を維持しつつ、都市のアメニティの供給にも展開することに注目し、テーマとしてIの「都市での埋葬の検討」で、

まずロンドンでの埋葬事情として、

『埋葬と掘り起こし』⁽⁴¹⁾（1843年）、

『セントパンクラス教区の共同墓地での埋葬苦情に関する調査報告書』（中央衛生局に提出）（1850年）、

『城壁外埋葬』と題する著書からの抜粋（「ロンドン・大共同墓地及び霊廟計画概要」）⁽⁴²⁾（1851年）、

「城壁内埋葬擁護論」（1855年）のパンフレット⁽⁴³⁾、

次いでグラスゴーの埋葬事情として、

『グラスゴー版大霊園構想』(1857年),
『グラスゴーの墓地に関する報告書』(1876年),
『パディントンの衛生医務官の報告書』(1867年)⁽⁴⁴⁾,
『火葬と骨壺葬, つまり将来の墓地』(1889年), が収められている。

Ⅱの「健全な都市のために緑地の保存」で墓地・公園・オープンスペース(運動場も含む)の効用, つまり, 公園とオープンスペースの推進運動は, 庭園墓地という考え方と連携することになる。かかる史料として,
『死者の置き場所としての墓地, 主として健康, レクリエーション, 瞑想, 娯楽, そして公園の代替としての場所』(1848年)⁽⁴⁵⁾,
『ロンドンの公園, オープンスペース, 大通り』(1869年)⁽⁴⁶⁾,
『マンチェスターのレクリエーションのためのオープンスペース』(1883年)⁽⁴⁷⁾,
『首都公共庭園協会の第二年次報告書』(1884年),
『高濃度汚染地域でのオープンスペース, 運動場の価値』(1884年), が収められている。

Ⅲの「スラムの撤去と街路改良」ではグラスゴーとロンドンの改善事情を扱っているのが,
グラスゴー⁽⁴⁸⁾に関する史料として,
『スコットランド建築協会誌のグラスゴー衛生改良報告』(1852年),
『グラスゴー都市法人に提出したパリの都市改良の視察調査の覚え書き』(1866年)⁽⁴⁹⁾,
『グラスゴー改良トラストによる改善実施の直接の成果』の報告(1875年),
『イギリス王立建築学会誌』の「グラスゴーの改良と都市改良法」報告(1879年)

ロンドンに関しては, スラムの撤去の衛生的有効性に疑義を提起し, 既存のスラムの撤去は, 別のスラムを作り出し, さらに過密状況を悪化させていると論じる以下の史料がある。

『ロンドンのアッティラ』(1866年)⁽⁵⁰⁾,

『改悪』(1872年)⁽⁵¹⁾,

『首都土木局の1855年から1882年までの改良実績の報告書』(1883年),

『公衆衛生法の条項に基づく不健康な地域の撤去』(1887年)⁽⁵²⁾

紹

「ロンドンの街路改良」⁽⁵³⁾の将来に関するものとして、以下の史料があるが、これらは、「功利主義的であった」とされる首都土木局に代わって、ロンドンに最初の直接選挙により設立されたカウンティ・カウンシルが首都改良を担当することに期待されていた時期⁽⁵⁴⁾の文書である。

介

『ロンドンの街路改良』(1890年のⅠ)

『ロンドンの街路改良』(1890年のⅡ)

7. 第5巻「衛生改革、階級、ヴィクトリア時代の都市」

第5巻は、「衛生改革、階級とヴィクトリア時代の都市」を表題としている。「衛生改革」という用語は、1830年代から40年代にかけて、出現するのであるが、この時代こそイギリスの人口がタウンや都市に移動し、社会調査官や官僚がこの事態を調査・監察を通じて、いかに理解すべきかを問われた時期に当た⁽⁵⁵⁾る。本巻は、衛生改革、階級とヴィクトリア時代の都市との相互関係を明らかにする史料を収集している。この時期、衛生改革に関する講演、勧告、特別委員会の報告書、報道という情報の殺到、さらに衛生改革が、国家的ないし地方的、政治的、法律的、財政的、教育的、宗教的領域といった多様な領域と絡まっていたという多面性を考慮すれば、どこまでバランスある収集がなされているかに注意するとともに、衛生改革と階級、都市化の関連が、いかに複雑で相互に影響しているかに注目せねばならな⁽⁵⁶⁾い。

5巻のⅠでは、「都市の実態と調査」というテーマのもとに、都市を衛生改革の対象と認識し、これを調査した組織と実態調査に注目している。

以下三つの史料は、まず「家庭訪問と普及」として、1857年に創設された全国婦人衛生知識普及協会（一般的には女性衛生協会 LSA と称される⁽⁵⁷⁾）に関する文書である。

全国婦人衛生知識普及協会の『第二年次報告書』（1859年），
同協会発行のパンフレット「衛生改革における婦人の仕事に関する詳説 第3
(58)
版」(1862年)，
同協会の『我々の寝室の過密状況 (Black Hole) 』（1860年頃），

以下の文書は、主として都市当局の役人とその専門化された組織による業務
である「衛生監察」(Sanitary Inspection)を巡る史料であるが、「衛生監察官」，
「不法行為監察官」(Nuisance inspectors)の権限や監察の実態（組織化された
官僚制的手法，対人関係に重きを置く外交的手法など）を示す史料となってい
(59)
る。

『住居の衛生調査，ロンドンの住居を参考にして』第3版（1880年），
『住宅事情と貧困層の住居の調査』（1884年），
『国家医療ジャーナル』掲載の「衛生監査に関する法律上の心得」（1893年），
『衛生監察官のハンドブック』第2版（1897年），
『国家医療ジャーナル』掲載の「婦人衛生監察官」（1902年）が収められてい
る。

Ⅱの「家庭生活とスペース」では、ヴィクトリア時代の住宅改善に関する文
書を収集している。上流・中流階級の住宅でも建築規則の不十分な義務条項，
入居者と所有者における無知無関心，建築業者と測量士さらに行政当局の怠慢
によって，衛生上問題がないわけではなかったが，総じて快適な状況に向かい，
それらと対照的に，下層階級における簡易宿泊所 (Common Lodging Houses)
が，注目されている。これは，低所得者向けの安宿泊施設で，当時しばしば
「社会のくずと残骸」(the dregs and detritus of society)と呼ばれた人々向け
(60)
の宿泊設備といわれたものである。

中産階級の住宅と家庭スペースの史料として，
『上流・中流階級の住居に見られる衛生設備の不備と不足，そしてそれらを調
整する方法の提案』（1875年），
『都会風邸宅とカントリー風邸宅と郊外の住居，衛生的で優雅な住居建設の
覚え書き付き』（1879年），

簡易宿泊所の史料として、
『或浮浪者の印象記——ロンドンの簡易宿泊所暮らしの暴露』⁽⁶¹⁾（1886年）、
『グラスゴアの公衆衛生行政』所収の「簡易宿泊所」（1905年）、
『建築技師（*Builder*）』掲載の「ロンドン・カウンティ・カウンスル立宿泊所
の見取り図」（1891年）、
『衛生記録（登録）（*Sanitary Record*）』掲載の「簡易宿泊所とその条例」講演
（グラスゴー）（1897年）がある。

Ⅲの「清潔と高潔」もとに公衆浴場と洗濯所の史料が収集されている。「個々
人の清潔」と「体を洗ったり、入浴したりする習慣」は、個人的、一身上の事
柄なのであるが、この「行為」に関わる設備等の文書を紐解けば、衛生上の微
妙な相異が見いだされ、そこに階級関係と社会的地位に関する無数のニュアン
スを読み取ることが出来る。⁽⁶²⁾

『労働者階級用の公衆浴場と洗濯所設置促進のために採択された事前的措置の
声明書』（1845年）、

『首都の公衆浴場と洗濯所の調査から得た事実と推論』⁽⁶³⁾（1853年）、
『建築技師（*Builder*）』掲載の「ランカシャーのアシュトン・アンダー・ライ
ン（*Ashton-under-lyne*）⁽⁶⁴⁾ バラー直営浴場」（見取り図と外観イラスト）（1870年）、
『建築技師（*Builder*）』掲載の「パディントン教区の公衆浴場と洗濯所」（見
取り図と外観イラスト）（1874年）、

『国家医療ジャーナル』掲載の「公衆浴場と洗濯所」⁽⁶⁵⁾（1900年）、
トルコ風呂の史料としては、
『トルコ風呂の効用と弊害』（1861年）、

『トルコ風呂、それらの健康・感覚との関連』⁽⁶⁷⁾（1898年）、
清潔の倫理と実践に関する史料として、

『健康な皮膚』第5版（1855年）、
『マンチェスターで住民のための健康講義』の第7巻に掲載されている「洗浄
と入浴」（1884年）、以上が収められている。

8. 第6巻「世紀末の評価と新たな方向」

第6巻には、19世紀末には「衛生観念」がイングランドのすべての階級に浸透し、あたかも空気や話し言葉の様な存在となりつつも、競合する諸観念によって挑戦され、討議され、補強される状況を示す文書が「世紀末の成果と新しい方向性」⁽⁶⁸⁾という表題のもとに収集されている。⁽⁶⁹⁾

更に、本巻は、19世紀後半の30年間に於いて形成過程にあった新分野の状況を伝えるキーワードとして、「住居」(the house)と「身体」(the body)（個人の衛生と社会的人種的衛生を一纏めにした用語として⁽⁷⁰⁾）とに注目し、まず、住居と衛生の関連から、Iの「建築と衛生改革：貧困層と中産階級」のもとに、史料を収集している。

このIは、さらに田舎と都会という文脈で、「貧困層」に注目して、以下の史料を分別収集している。

『農民の住居、1760～1875年』（イングランドの農村部の貧困層の住宅事情を扱った）（1876年）、

『二軒の小さな住居』（全国衛生協会の会員による⁽⁷¹⁾）、

『村の健康⁽⁷²⁾』のなかにある「語られた話と得られた教訓」（1884年）、

『健康的な住宅と衛生改革に関する実践的指針（ガイド）』（1884年）、

『一室ないし二室ある健康な家庭』と題するパンフレット（1888年）、

『住家』と題した農村地域の過密に注目した著書（1898年）、

「衛生観念」は、あまねく浸透しつつも、競合する諸観念によって挑戦され、討議され、補強されるのであるが、衛生改革は、立法によって促進されるのか、個人の領域でなされるべきなのか、あるいはそれらの結合によるのかにつき、結局は、以下の「衛生法」に関する史料では、衛生立法に関する知識を教育で普及する、あるいは女性に普及の役割を担って貰おうなど世論形成に注目する。

『庶民の住宅、法律は健康な家庭にどのように役立っているのか』（1898年）、

『借家人への衛生質問票』（フェビアン協会の）（1896年）、

『健康な家庭とそれを維持する方法』（1905年）、

以下の文書は、前述の「衛生建築」の中産階級に関するものであるが、「中産階級は、近隣の貧しい地域の汚れた空気が自分達の家庭空間まで及んでいたことは想像したが、自分達の家庭空間自体が不衛生とは思わなかった」という新たな住宅事情を以下に収集している。⁽⁷³⁾

『住居とはどうあるべきか』と題する一般向け必携本（1873年），

『健康への脅威，衛生上の欠陥に対する挿絵入りガイド』（専門家及び中産階級一般向け）（1878年，1883年），

『一戸建て住宅，快適さ・節約・健康を調度品や家具に関する心得によって確保する方法』（1879年），

『国際健康博覧会の公式ガイド』（1884年），⁽⁷⁴⁾

『衛生科学の一般向教本』（1884年），⁽⁷⁵⁾

『望ましい邸宅』（1882年），⁽⁷⁶⁾

「ペパーミントと煙試験」（The Peppermint and Smoke Test）の下に収集された文書は、実は、健全な住居の診断に関する史料である。つまり、以下の文書は、住居の立地条件などに考慮しないことによる危険を、技術的なマニュアルや行政資料から家庭ガイド、パンフレット、一般向けの出版物まで広いジャンルの文献をもとに家庭衛生に関する基本事項を教えるために書かれた文書である。⁽⁷⁷⁾

『二本のイチジクの木のもとで』（小説仕立ての）（1886年），

『家の衛生状況を決定する方法』（1892年），⁽⁷⁸⁾

『住宅立案者（設計者）』（1891年），がある。

Ⅱの「衛生学と健康」（Hygiene and Health）のもとに，⁽⁷⁹⁾

まず，家庭内衛生学と健康（Domestic Hygiene and Health）に関して，

『衛生記録（登録）』に掲載された「衛生改革」⁽⁸⁰⁾（1879年）がある。

次いで、「細菌説と家庭内健康」に関して、以下の二つの文書が所収されているが、これらは、発表年次も離れているし、家庭内健康の方向付けについても異なるものであるが、細菌説ないし細菌理論が公衆衛生に関する通説的理解で

あることを再構築する方法を説明している。

『イギリス医学ジャーナル』掲載の「家庭の健康に関する声明文、ブライトンでの衛生学会年次集会で配布された」(1881年),

『健康』に掲載された「疾病と細菌に就いての講話」(1892年),

上記の二つの文書とともに, 以下の史料は, 細菌理論の受容が進まなかったことを示唆している。⁽⁸¹⁾

『衛生, 個人と公衆, カウンティ・ディストリクト・教区の役人のための本』(1902年)

「社会的・人種的衛生学」とは, 身体的劣化ないし退化の問題であるが, これは, 田舎から都市への人口移動を契機に人口の周密な都市生活がもたらす身体への影響, そしてクリミア戦争やボア戦争後に惹起した身体劣化による国防問題への対応と関連する。この対応は, 「適者生存」という社会的進化論(社会的ダーウィン主義)で促進され, 「社会衛生」を公衆衛生と優生学との「婚姻」と定義されることになる。⁽⁸²⁾

『衛生改善家による衛生改革に関する覚書』(1870年),

『衛生改革, 実があるのかなのか』(1875年),

『大英帝国衛生学会誌』所収の「クロイドンで開催された大英帝国衛生学会三次報告書」の「健康な島」(1880年),

『衛生医務官学会(法人)ジャーナル』の「予防医学は民族劣化を惹起しているのか」(1894年),

以上の史料とともに, 特に「種族改良(優良種養殖)」に関しては, 以下の史料が収集されている。

『愛の生理学, 種族改良研究』(1997年),

『種族改良, すなわち賢明な世代による子孫の改良』(1897年)

9. お わ り に

以上, 第1巻から第6巻まで, どのような史料が含まれているかを概観して

きた。各巻は、第1巻に、「医療と衛生科学」、第2巻に、「地方における衛生改革」、第3巻に、「衛生工学」、第4巻に、「衛生改革と都市改善」、第5巻に、「衛生改革、階級、ビクトリア時代の都市」、第6巻に、「世紀末の評価と新たな方向」と各々表題が付され、これらの「表題」のもとに収集・分類されている。確かに、第1巻は、1820～30年代の統計分析と医業、第6巻は、世紀後半の衛生改革の方向性というように、特定の時代に限定しているが、他の諸巻では、文書は、世紀を跨ぎ、年代順に配列されているものの、「テーマ」にそって、収集され、本コレクションは、このような配列傾向を持っている。このような配列傾向をもったコレクションが、都市化と産業化されたビクトリア時代前半のイギリス、特にロンドンなどの都市部を理解するのに有用であることは疑いないであろうし、「衛生改革は、不潔を根絶し、変化させること、科学、医療、エンジニアリング、建築、教育、警察と法律によって、健康の助けになる状況を促進することと関連づけられた⁽⁸⁴⁾」という総体的説明体系との理解にも有用である。

しかし、監修者は、衛生改革をこのような「テーマ」に沿って理解することは重要であるが、諸巻を跨ぐ共通の観点にも注目すべきとする。共通の観点とは、過去数十年にわたる衛生改革に関する歴史的研究方法ないし動向に関わるものである⁽⁸⁵⁾。

それは、「衛生改革は、その展開において、論争的プロジェクトであり、一様ではない⁽⁸⁶⁾。」ということである。つまり、衛生改革は、予定説のように総体的説明体系とのイメージが一方にあるのに、一連の論争的理論と進化する実践としてより一層理解できるということ、特に疾病原因と媒体を巡って、長い間論争が続き、1883年にコッホによってコレラ菌が特定された後でも、「細菌説」の受容は、一様ではなく、「論争的」であったという点である。まさに「新たな考えは、既存のパラダイムに順応させられ、パラダイムに影響を及ぼすかもしれないが、破壊するものではない⁽⁸⁷⁾」ということである。

このことは、理論のみならず、実践でも論争的で、包括的下水道システムは、衛生政策と実践の命令を巡って、反中央集権論者の対抗のみならず、衛生改革論者の対抗にも直面した。それは、廃棄物処理を巡っても乾燥処理、汚水利用農業、科学的沈殿法、人工的濾過法、生物学的濾過法というように意見の相違

が見受けられた。⁽⁸⁸⁾

更に、「論争的」に関わることだが、衛生改革が、優位な出来事や経験を中心に歴史的に説明されるという点である。つまり、都市生活の汚物や過密状況と疾病と関連しているとするのが当時としては極当然の反応であったことから、衛生改革が、給水と廃棄物処理を結合するテクノロジーを衛生進歩の象徴とし、また、エドウィン・チャドウィックをそのリーダーとしつつ、説明されてきたという点である。⁽⁸⁹⁾しかし、エドウィン・チャドウィックは、増大する救貧税負担の軽減策を汚物処理で疾病を予防することに求め、一連の政治的現実に対する選択として衛生改革を捉え、衛生改革を技術者と行政官の専門知識を必要とするインフラストラクチャー問題、さらに公衆衛生を下水問題とすることが「功利主義的」と認識したのである。このことは、衛生改革が、偶然・偶発性により一部規定され、当時の政治的社会的枠組みの範囲内で可能と思われる方向に展開したということである。つまりこのコレクションの各巻で、衛生改革ないし衛生立法が現代国家の形成、とくにヴィクトリア時代の政府発達における中央集権傾向に関与しているとの論点である。本コレクションは、干渉主義的論点を修正しつつ、衛生改革が、自己と社会、自由とガバナンスとの緊張関係を示す分野であり、ビクトリア時代の国家の文化と政治の理解にとって役立つ観察の機会を与えているということである。

評者の関心からすれば、第1巻のⅡの「公衆衛生の出現（創発）」にある『衛生改革に関する協会メンバーと公衆に対する委員会報告書』（ロンドン衛生協会による）（1847年）、つまり、「ロンドン市長のような旧いより伝統的な権威に入れ替わって、政治、医師、地域の指導者が専門的見解や首都のより包括的ヴィジョンを権威とする経緯」を扱った史料、そして、第2巻の「地方における衛生改革」と題し、イングランド、アイルランド、スコットランドの都市やタウンにおける衛生改革に関連した史料に注目するところであるが、監修者が述べるように、本コレクションは、「衛生改革を競争的で、多様性を有したものとする見方」につき、「広範囲にわたる分野とジャンルからのテキストを含み、専門家と一般にとっての展望」を示めすとともに、収集された史料の選択の仕方についても、議論を期待できる文献とされている。⁽⁹²⁾

注

- (1) Tina Young Choi (ed.), *Medicine and Sanitary Science*, Sanitary Reform in Victorian Britain/general editor Michelle Allen-Emerson; pt. 1, v. 1, vii, Pickering & Chatto, 2012. 以降、*Sanitary Reform in Victorian Britain* の各巻からの引用については、この脚注(1)の場合を例にとれば、(V1-vii.)との略記となる。
- (2) Ibid.
- (3) (V1-viii.)
- (4) (V1-xii.)
- (5) (V1-xxiii.)
- (6) サンドラ・ヘンペル『医学探偵 ジョン・スノウ』日本評論社 2009年 65～67頁では、19世紀前半では直接感染説と非直接感染説ないし瘴気説があり、「悪臭、あるいは『瘴気 (miasma)』は排泄物、腐敗した肉や植物性物質」から発生するから、「汚物が人を病気にする毒」を含んでいたとされ、フローレンス・ナイチンゲールは、生涯瘴気論者とされ、新鮮な空気の力を信じていたといわれている。
- (7) 主として、作業場の運営上の効率・節約などの理由から、教区が合併され、教区連合 (a union) が組織された。拙稿「1834年の救貧法改革と1848年の公衆衛生改革」『法と政治』関西学院大学法政学会 第30巻 第3・4合併号 139頁参照。
- (8) 従来、救貧法実施組織は、概略的には治安判事 (the justice of the peace), 教区会 (the vestry), 救貧吏 (the overseers) で構成されてきたが、特に治安判事が、総括的に実施を支配してきたといえる。しかし、徐々にその統制力に変化が生じ、1834年の改正救貧法によって治安判事は、遂にガーディアン (a board of guardians) という委員会制の救貧行政組織の一構成員となった。小貴族制の網状組織といわれたガーディアンという組織が一体となって救貧法を実施したことに注目して、ガーディアンという用語を使用した。拙稿「政治制度としての新救貧法組織の展開について」『法と政治』関西学院大学法政学会 第37巻 第4号 385～397頁参照。尚、1866年当時では、衛生に関連する権限が衛生当局と救貧法当局との間で対立していた。前掲論文55～58頁参照。
- (9) (V1-xxiv.), (V1-p. 31, pp. 39-43.)
- (10) (V1-xxiv.)
- (11) Health of London Association
- (12) (V1-pp. 69-70.)
- (13) (V1-xxx.)
- (14) サイモンの業績とこの庁の成立過程等については、拙稿「19世紀中・後期のイギリスの公衆衛生改革における J. サイモンの業績に関する序論的考察——伝統的権威との『葛藤』——」関西学院大学法政学会『法と政治』第46巻 第4号で扱った。
- (15) William Farr (1807～83) は、1837年に中央登録局 (The General Register Office) の統計官となった。(V2-p. 190.)
- (16) (V1-xxx.)
- (17) (V1-vii-ix.)
- (18) 不法行為ないし不法妨害の事例としては汚物の投棄・放棄による街路等公共の場の汚染である。
- (19) ランカスター公領内にある荘園及びリバティ (Liberty=特権地域) である。

- (20) この匿名のパンフレットは、エディンバラにおける熱病の増加が、エディンバラから何マイルも離れた農業灌漑の存在とは異なった原因にあると論じている。(V2-p. 89.)
- (21) イングランド南西部コーンウォール州の州都
- (22) 東ロージアン (East Lothian) カウンティにある当時の人口4000人の炭鉱町。
- (23) (V2-xi.)
- (24) ウェールズ南東部
- (25) Public Health Act (11 & 12 Viet, c 63.) に基づき実施計画の作成に際して、中央委員会の補佐委員による調査・審問である。
- (26) President of the Local Government Board. 地方自治庁法 (The Local Government Board Act, 34 & 35 Vict. c. 70.) が制定され、これによって、救貧庁、中央登録局、内務省の地方自治担当部局、枢密院の医務部局を統合した地方自治庁が1871年9月に創設された。この庁の成立過程等についてはサイモンの業績に関する前掲論文で扱っている。
- (27) (V2-xi.)
- (28) (V2-xii.)
- (29) スコットランド中南部を北西に流れ、グラスゴーを経て、クライド湾に注ぐ。
- (30) (V3-ix.)
- (31) (V3-xiii.)
- (32) (V3-xiii.) ただし、オックスフォードとウインチェスター地域では1870年代に下水道システムを導入しているが、マンチェスターではトイレと汚水だめの代わりに、手桶トイレ (乾燥保存法による汚物処理) を用いることで1870年代をやり過ごすしている。
- (33) 1856年から1889年まで首都土木局 (Metropolitan Board of Works) の首席技師であった J. W. バザルゲッテ (1819~91年) の記念碑がウェストミンスター橋とブラックフライヤー橋の間のテムズ河畔にある。
- (34) S. HALLIDAY, *The Great Stink of London*, SUTTON PUBLISHING, 1999, pp. 80~81. にバザルゲッテの遮断下水道の計画図が掲載されている。
- (35) (V3-pp. 163-164.)
- (36) (V3-p. 209.) ロンドンの水道会社の数とその不画一状況が20世紀まで継続したのに対し、グラスゴーの上水道では、1840年代と50年代には、十分な水量や行政統制を確保していたことに注目し、グラスゴー水道に関する史料と明記して収集されている。
- (37) 首都土木局の上水道計画が、地方税の増加をもたらすという計画案の批判的検討に関する史料である。
- (38) 中央政府の土木当局 (委員会方式の行政当局の主席委員 (委員長)) のジョン・マナー卿への書簡である。書簡をだした G. クード (George Coode) は、代替下水道案の提示でもテムズ川の状態への警告でもなく、汚水の農地利用を推進することであった。(V3-p. 283.)
- (39) ミドルス・バラー・クリーヴランド技術者協会 (学会) 事務局発行のパンフレット。(V3-p. 339.)
- (40) 3巻ではテムズ川の汚染を防ぎ、議会・公衆そして下水の浄化、河川の清掃を管理するロンドン港・衛生当局を満足させるのに重要な役割を持った文書 (首都土木局の首席化学員が作成した) と見なされている。(V3-p. 353.)
- (41) 新たな死者を葬る余地を作り出すために、以前埋葬した棺を壊したり、除去したりし

- た。著者ウォーカーは、モーニングヘラルド紙への書簡を引用し、首都でのこの実践に対し、瘴気理論から健康に及ぼす危険、深い掘削による無酸素症での墓堀人夫の窒息死などを指摘した。(V4-p. 1.)
- (42) 鉄道の利用を前提に、郊外に一大霊園を創設する構想である。
- (43) 数ある埋葬法のうちで最も注目される1852年法は、内務大臣に首都内での埋葬を禁じ、教区に、共同墓地を供給・管理する埋葬委員会を創設する権限を与えた。(V4-p. 87, p. 94.) この文書の著者であるロンドン副司教のウィリアム・ヘールからすれば、教会境内から共同墓地へ埋葬を移すことは、聖職者と教区民の関係を断ち切り、しかも死者から最も強い宗教的繋がりを奪うことになるということであった。(V4-xii.)
- (44) 非国教徒の感情からすれば、墓地が閉鎖されることで、彼らの宗教的独立が損なわれ、また死亡から埋葬までの間、遺体を家庭に置かず、公共の霊安室に置くことにも抵抗を感じたのである。(V4-xii.)
- (45) 著者ジョン・ムーディ医師は、公園でのレクリエーションが良い方策で、より良い、より力強い労働者を作ると主張し、これらを根拠に公園の設置を推奨した。(V4-xiii.)
- (46) アレキサンダー・マッケンジーは、オスマン設計のバリとは異なった実用的で、ビネス風のイギリス・タイプの都市整備を強調した。(V4-p. 163.)
- (47) 『健康ジャーナル』から転載された一連の書簡 (V4-pp. 177-87.) で、ハバート・フィリップスは、第4巻所収の『高濃度汚染地域でのオープンスペース、運動場の価値』(1884年) (V4-pp. 213-24.) とともに、公園や遊び場が、健康状態を回復するのに不可欠な役割を果たすと述べた。
- (48) グラスゴーは、チャドウィックの1842年の衛生報告書では最悪の場所としてあげられたが、それから25年後、グラスゴーは、英国で最も包括的都市再開発の見られるところとなった。(V4-p. 225.)
- (49) グラスゴーは、撤去計画に備えてバリに派遣団を送った。このグラスゴーの派遣がイギリスの多くの都市にバリ・モデル (1850～1860年代のオスマンによるバリ再建) を試金石となさしめることとなった。(V4-xiv.)
- (50) チャールズ・ディケンズの週刊誌への寄稿文。スラム撤去の名のもとで、都市を破壊していると主張する。
- (51) 改良住宅の設備に関する、タイムズ紙、メトロポリタン紙、オブザーバー紙、デイリーニューズ紙の記事からの抜粋。前掲文書と同様に改良の逆効果を指摘する。
- (52) アイルランドの医学アカデミーの医療国家管理部会での講演。
- (53) 『新評論 (New Review)』に掲載された論文。
- (54) (V4-p. 355.)
- (55) (V5-vii.)
- (56) (V5-vii-x.)
- (57) (V5-xi.) 政治的急進主義にオルグされた労働者階級の男性を対象とした知識普及協会とは異なり、この組織は、女性、特に母親に知識を普及させようとして設立され、上品で公共心ある、強い福音主義的目的意識を持った女性スタッフで、構成されていた。(ibid.)
- (58) 1859年の『イギリス婦人ジャーナル』3:16と3:17に掲載された文書の修正版パンフレット。
- (59) (V5-xiv.)

- (60) (V5-xvi.)
- (61) 前科者に変装し、簡易宿泊所内の生活実態を綴った潜入ルポであるが、特に第11～12章が、「簡易宿泊所法とその実施実態」を暴露した史料として収集されている。(V5-pp. 131-144.) 著者の Howard J.Goldsmid に就いての略歴は、Howard J.Goldsmid, *A Midnight Prowl Through Victorian London*, 1887. の序文参照。
- (62) (V5-xvii-xxii.)
- (63) 1846年の公衆浴場及び洗濯所法は、バラー及び教区に直営の施設を設置する権限を付与した。(V5-p. 193.)
- (64) イングランド北西部、マンチェスターの東方の都市
- (65) 著者のティルトマン (A. H. Tiltman) は、イギリス・アイルランドのみならず、フランス・ベルギー・ドイツ・オーストリア・ハンガリーの施設設備に精通していた。(V5-p. 211.)
- (66) 蒸し風呂の一種で、部屋ごとに温度を徐々に高めた熱気を充満させる乾燥浴、発汗後に体を洗い、マッサージ、そして減熱室で休養する。(V5-p. 223.)
- (67) A. H. ビアーソンが、レノックス (Lennox) というペンネームで執筆。(V5-p. 235.) トルコ風呂がイギリスに導入されてから30年以上経つのに、使用上の混乱があったようである。この史料の執筆動機は、トルコ風呂の奨励だけでなく専門家間での無知を正すことでもあった。(V5-p. 235-236.)
- (68) 文書は、男女からなる、専門家及び一般によって書かれ、貧しい者、中産階級そして時折上流階級を対象としつつ、しばしば辛辣で、憎悪に満ち、あるいは、親密で信頼に満ち、また、情報を提供し、教訓を与える内容であり、これらは、衛生観念がいかに活気であふれ、多方面にわたり、包摂的であるかを示している。(V6-x-xi.)
- (69) (V6-x.)
- (70) (V6-xiii.)
- (71) この冊子には、建築された環境が居住者の健康と幸福の唯一の決定要因ではなく、居住者自身が重要な役割を持っており、彼らの知恵と努力も重要という主張がある。(V6-p. 15-16.)
- (72) 元々は、国際健康博覧会ガイドブックの執行委員会とロンドン学術協会の理事会とに提出された88頁の本である。(V6-p. 31.)
- (73) (V6-xiii.)
- (74) 国際健康博覧会は、ロンドンの南ケンジントンで5月～11月に開催された。(V6-p. 189.)
- (75) 19世紀後半に、衛生改革の普及に貢献した教本である。(V6-p. 201.)
- (76) 全国衛生協会会員のパンフレットで、衛生科学の一般向け注釈と著者考案の換気装置を結びつけた16頁からなるパンフレットである。(V6-p. 213.)
- (77) (V6-p. 221.)
- (78) 依然として、瘴気理論が主張されている。(V6-p. 222.)
- (79) 衛生学と訳した。ランダムハウス大英和辞典によると、初出1597年、近代ラテン語、ギリシャ語からフランス語を経由した言葉とされる。
- (80) 著者のマーク・ジャッジ夫人は、衛生改革を三つの関連する側面、すなわち (1) 教育の役割 (2) 婦人の役割 (3) 医療専門家と一般公衆による衛生改革論に関する相互的

無視，から論じている。(V6-p. 251.)

(81) (V6-pp. 257-8.)

(82) (V6-xvii.)

(83) (V1-xv.)

(84) (V1-viii.)

(85) ibid.

(86) ibid.

(87) (V1-xiv.)

(88) ibid.

(89) ibid.

(90) 1834年の救貧法改革と1848年の公衆衛生改革との関連性については，注7で前掲した拙稿「1834年の救貧法改革と1848年の公衆衛生改革」を参照されたい。

(91) (V1-xvi.)

(92) 解題が付けられていることは，2.で既述したが，さらに各巻には序の後に文献表が，各巻末には編者の注釈があり，そして，最終巻の6巻には暗黙の訂正，その巻末には索引が付けられ，読者の利便性が考慮されており，これらの点も本史料集の特質といえるであろう。

紹

介